

信州日帰り登山

ポリテクセンター長野の郡司さんより紹介していただきました。私と同じ機械系で同年代のいつも温和な郡司さんとは、仕事に遊びに何かと親しくさせてもらっています。多趣味で年間3万キロも走破する行動派の郡司さんに比べ、レンタルビデオで映画を見る以外に趣味のない私は困ったのですが、日本一標高の高いポリテクセンター勤務らしく登山の話にしようと思います。

松本に初めて車で来たとき、松本市に入ったことを示す「松本市 ここは標高632m」との看板にひどく驚きました。実家の近くに「高尾山」という東京近郊の日帰り登山の山があるのですが、その標高とほとんど変わらなかったからです。これから毎日「高尾山」の頂上で生活するのか、と妙に感激したことを覚えています。

毎日眺めている北アルプスに日帰りできる山はないものかとインターネットを探してみたところ、まめな人がいるもので、実際に登った山の登山口から山頂までの行程が写真を使って実に詳しく紹介されているホームページを発見。しかも国土地理院にリンクが張っており、2万5千分の1の地図がインターネット上で閲覧できるのです。

この地図を見ながらインターネット上の写真や動画を見る“バーチャル登山”をしていると、すっかり登山をした気になってしまいますが、実際に乗鞍岳や焼岳、木曾御岳、蝶ヶ岳などへ同僚とともに登ってきました。

山を登り始めるとさまざまな登山者に出会います。よく年配の登山者からは「君たちは街へ遊びに行くような格好だな」と咎められます。彼らの完璧なまでの登山スタイルに比べ、スニーカーを履き、帽子からリュックまですべてユニクロの軽装備。しかもリュックの中は水と弁当を忘れてきたのに、ビールが入っているという状態を知られたら、張り倒されていたことでしょう。

その時は同僚にまで冗談交じりに「人間、極限状態になると人の水を奪おうとするんですよ」と警戒される始



蝶ヶ岳(2,677m)山頂にて

末でした。僕はそんな人間ではないよ、と言いたかったけれど、途中の湧き水がなかったら危なかったね。H君。

登山中は暑いだけの、疲れただけの、ありもしない古傷が痛むのだと泣き言ばかりですが、山頂に着けば、その眺望と澄んだ空気に苦勞を忘れ、今度はあの山に登ろう！と、もう次の登山を考えています。その日の思いつきで、2,000~3,000m級の山に登れるのは、信州ならではの贅沢ではないかと思えます。

ところで話は大きく変わりますが、ポリテクセンター松本が映画の撮影に使われました。東野圭吾原作の「手紙」という映画で、山田孝之、玉山鉄二、沢尻エリカなどが出演しています。当センターは刑務所内の訓練施設として一瞬登場し、職員も鬼(?)教官としてエキストラ出演しています。

実習場に大きなセットを作ることもなく、そのまま刑務所として使ってしまったことに少なからず衝撃を受けましたが、11月の公開が楽しみです。レンタルになったら・・・いや、映画館へ見に行こうと思います。

次は私の数少ない知り合いで、同期のポリテクセンター静岡の伊東さんです。